



自然食へ—小さな村の大きな試み

松本 侑壬子・ジャーナリスト

「食の安全」とは、今では聞き慣れた言葉だ。だが、その実態と危機感とは、まだ十分に認識され、対応策が取られているとは言いがたい。

このドキュメンタリーは、自ら直腸がんを患ったのを機に、自分の生命だけでなくすべての動植物を含めた環境問題に真剣に向きあい、環境保護のために生涯を捧げようと決心したドキュメンタリー作家が、1年がかりで南フランスのある小さな村の大きな試みを追った記録である。

映画の原題は『子どもたちは我々を告発する』。2006年、パリ・ユネスコ本部で行われた「がんと環境汚染」についてのシンポジウムで、アメリカ環境健康科学の専門家が行った「現代の子ども世代は、親世代に比べ健康的に劣る。これは近代史上初めてのことであり」というショッキングな報告に基づいている。

映画の冒頭のこの発言に続き、画面には深刻な地球環境の実態が次々に報告される。「人間の行動が病を生む。その筆頭が化学汚染だ」「フランスの農業で使用する農薬の90%を殺虫剤が占めており、小麦に施される処理は9種、リンゴ栽培の処理は27種に及ぶ」「地球上の水資源の約70%が農業用水として使用されている」「100年で食用になる種の75%が消滅」など…。

怖い、困った、なぜ？ と手をこまねいていないで、「だから、こうする」と地球上の方で

人々が動き出した。ゴッホがヒマワリを描いたフランス南部アルルの近くガール県バルジャック村もその一例。村の外観はゴッホの絵のように美しいが、実は土や水は汚染され、住民は被害に苦しんでいる。そのギャップの大きさが監督を映画製作へと突き動かしたのだという。

農薬や化学肥料による食物汚染が子どもたちの未来を脅かすのなら、まずすべての学校給食と高齢者の宅配給食をオーガニック（自然食）にしようとする村長以下村ぐるみで立ち上がった。これは、その前例のない試みに挑戦した1年間でカメラで追った記録である。

子どもたちは教師や農民、調理師らの指導の下に校庭につくった畑での野菜栽培や給食を通して、自然と安全、自給自足などについて体験を通して学ぶ。家庭では親子の会話が弾む。子どもからの影響で保護者の環境意識から暮らしの在り方まで変わっていくのだ。

一見、よくある小さな村の1つの試みのようだが、子どもを中心に親、学校、行政が一体となって食の安全をここまで徹底して推進していく例は、ありそうで現実にはなかなかない。

食糧自給率100%以上の農産物輸出国フランスは、自給率40%以下で食べ物のおお半を輸入に頼る日本とは対照的な農業大国だ。しかし、画面に映るワインの原料となるブドウ畑での農薬散布の様子やそれによる健康被害に苦しむ農家の話などは、フランスだけの問題ではない。生産国も輸入国も、農産物の“価格”か“安全”か、未来へ向けての選択を迫られている今、こうした映画はどれほど世界中の人々への励ましとなることだろう。地域ぐるみで徹底してやれば、ここまでできるのだ！と。

『未来の食卓』

フランス映画（112分）／ジャン＝ポール・ジョー監督

渋谷アップリンクほか全国ロードショー公開中

